

# 片桐 よし子（かたぎり・よしこ）

## 1、プロフィール

1975(昭和 50)年～1995(平成7)年の作品 444 首の歌集『花曼陀羅』を出版。

<生没>

1933(昭和8)年1月2日～2006(平成 18)年 11 月 13 日

<代表作>

○子を悼み生きてゆくべしわが庭の花曼陀羅に忌を重ねつつ

<青森との関わり>

1933(昭和8)年青森県弘前市に生まれる

## 2、作家解説

片桐よし子は、昭和8(1933)年1月2日に青森県弘前市に生まれる。昭和50(1975)年勁草短歌会に入会し作歌を開始。昭和 54(1979)年1月歩道短歌会に入会。本格的な写生、写実の世界に入る。初期の父の作品には次のような絶唱があり、心に強く響く。

- ◎もの言へば泪落ちなむ癒ゆるなき父の病床ひたすらに拭く
- ◎衰へし父を逃れて来し海の春の潮はかがやきに満つ
- ◎見る吾を労はる父の細きこゑ日に日に低く掠れゆくなり
- ◎病む父の心に触れむと読みをれど用件のみの文字ふとき文
- ◎さからひし記憶なければなほさらに父のかたへの寂しさ深し
- ◎チアノーゼ失せゆき父の息絶えぬあぢさゐの藍しだるる真昼
- ◎生くるとは慟哭に会ふことなりしあつけらかんと羅漢は笑ふ
- ◎凜々と仕事こなしし日の父も職退きて酒に浸りしもちち
- ◎晴ればれと未来を語る子らと居て逝きし子思ふ夕餉の卓に

作者の何気無い日常詠にも勝れた作品が多い。片桐よし子は津軽女流歌人の「火の会」「真朱の会」何れも福井緑主宰等に積極的に参加して、切磋琢磨、研

鑽を積み大きく開花した。その成果は東奥日報社主催の短歌大会で第1位が4度あり、青森県知事賞4回の受賞は今尚広く語り継がれている。東奥日報社、陸奥新報社の文芸欄の短歌部門の選者として活躍。当然県内の短歌大会でも選者を勤めた。

◎水底に咲く花の界あるごとくさくらを映す濠ばたをゆく

◎流木を置き去りにして引く波の気泡の粒子が日にかがやけり

◎春の夜の丘登りつつ見上ぐればうるほふ星のひかりは近し

これは短歌の本道を歩み続けた、片桐よし子の秀詠である。急逝はその才を業績を知る者にとっては痛恨の極みであった。